

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容 〇コロナ禍における厳しい現状の中でも、児童・生徒のために活動を拡大・充実し取り組んでいる。 ●積極的な情報発信を行い、校区の学校・保護者・地域とより連携を深めて欲しい。	児童生徒の現状 ●不登校出現率が高い。 ●運動不足、体力の低下が見られる。 〇地域の行事やボランティア活動に主体的に参加する児童・生徒が増えている。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	思考力・創造力 表現力 思いやり 能動的市民性				
				〇主体的に学び よく考える児童生徒	〇自分なりに表現し伝え合う児童生徒	〇思いやりのある児童生徒	〇人や社会に貢献しようとする児童生徒	〇住み続けられる町づくりを考えることを目的にした学習を核に各教科と関連づけたカリキュラムを実施することで、めざす子ども像に迫る取組を行う。 〇生徒の実態を細やかに分析し、生徒のつまずきの要因に対応した指導と支援を行う。

III 自 校

ミッション

変化の激しい社会の中で、未知な状況に自ら挑み続ける児童・教師
～自分で〇〇 みんなで〇〇 挑み続ける千田小～

学校教育目標

挑む ～学ぶ・想う・伸びる～

現 状（昨年度までの成果○と課題●）

<児童>

○「挑む」ための土壌が耕され、様々な場面で「挑む」児童が増えてきた。
○お互いを認め合う温かい声かけや行動が少しずつ増えてきた。
●学校として目指す「挑む」姿を共有し、それぞれの「挑む」姿をつなげる必要がある。
●自分のやりたいことに留まらず、目的意識や相手意識をもった「挑む」を目指したい。

<授業>

○習得した知識・技能が活用できる資質・能力の向上に向けて、「教科を相互に関連させた授業」をカリキュラムに位置づけ、充実させた。
○チームによる研究を推進することで、テーマごとに自由な発想のもとで授業研究が行うことができた。
●児童がその知識や技能を「活用したい」という意識を持てる学びづくりを行う必要があり、そのための教員のファシリテート力を高める必要がある。
●手立て・手段が目的化してしまう傾向にあり、常に目的を問い直す必要がある。
→目的は学校として目指す「挑む」姿の実現であり、そのための手段であり評価であるということを全員で共通理解し、意識していく。

育成する力
(21世紀型“スキル&倫理観”)

めざす「挑む」子ども像

自分で
みんな
挑み続ける

自分から進んで学ぶことができる子

仲間と協力して学ぶことができる子

日常的に行動する・最後まで粘り強く取り組む「もっとすごい」を目指して修正する

思考力・創造力

表現力

思いやり

能動的市民性

学ぶ

想う

伸びる

自分から進んで学ぶことができる子

仲間と協力して学ぶことができる子

日常的に行動する・最後まで粘り強く取り組む「もっとすごい」を目指して修正する

研究

テーマ

挑む ～「学ぶ喜び」のある授業づくり～

内容等

5つの教科チームに分かれてその教科における「学ぶ喜び」について研究し、交流することで学校としての「学ぶ喜び」のある授業の姿を追求する。

めざす授業の姿

児童が学びを「楽しい」「おもしろい」と感じることに留まらず、「わかった」「できた」喜びや学んだことを「生かせる」「深まる」喜び、他の教科での学びが「つながる」「広がる」喜びなどを味わうことのできる授業を目指す。
そのために、子ども主体の学びを支えるファシリテーターとしての教師の在り方も探究する。

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立 千田小 学校

年 目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	70% 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70% 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
2	個性を発揮し、自 ら挑み続ける教 職員	★	見 直 し	・自らの強みや個性を 生かした目標に向 けて実践する	・学年会・分掌部会な どでそれぞれの目標 を共有し、互いにア ドバイスし合うこと で自己更新へつなげ る(My Challenge として位置づける)	(1)業績評価の目標のう ち、My Challengeと して設定した項目の達 成度評価(自己評価)に おいて4以上の教職員 を8割以上 (2)教職員アンケート「目 標や夢に対して当事者 意識をもって挑戦がで きている」の強い肯定 的な回答を7割以上	・学年会を中心に、My Challenge を共有し たが、アドバイスをす るまでには至ってい ない。 ・夏休みに全体で My Challenge の目的や 意味について考え、取 組を見直した。 (1)66.7%(21/32 人) (2)51.3%(肯定的回答 93.1%)	3	3	・日常的に意識できる ように、定期的に振 り返る機会を設け る。 ・My Challenge を掲 示して見える化し、 互いの実践について 励まし支え合えるよ うにする。(再度学年 会に位置付ける。)	・職員室に掲示したり、学年会 で振り返りを行ったりする ことで、目標と日常の実践を つなげて捉えることのでき る教職員が増えた。 ・My Challenge の自己評価を 過小評価する傾向があるた め、設定した目標や評価指標 が妥当であるか検討する必 要がある。 (1)81.2%(26/32 人) (2)48.3% (肯定的回答89.7%)	4	4	4	・「自らの強みや個性を 発揮する」ことで働き がいにつなげる意識の 醸成を図る。 ・My Challenge として 設定している目標や手 立て、評価指標の妥当 性についても見直しを 行うことで、自身の成 長へつなげることがで きるような交流の仕方 を模索していく。
2	習得した知識・技 能を活用できる 資質能力の向上	★	見 直 し	・教職員が児童の学び の成果を捉えて評 価し、指導の改善に つなげる ・児童が学びを実感 し、様々な形で学ん だことを生かす	・教材研究の質を高め る(学びのゴールを 児童の姿でイメージ する) ・児童が学びを実感で きるような振り返り の場を設定する	(3)標準学力調査で昨年度よ り結果を伸ばした児童の割 合を8割以上(1年生は得 点率30%未満の児童の割 合を15%未満) (4)児童アンケート「学習した 内容について分かった点や よく分からなかった点を見 直し、次の学習につなげる ことができています」の肯定 的回答を70%以上	・研究授業後や学力テス ト分析研修後に「授業 改善宣言」を行い、研 修を授業改善につな げられるようにした。 ・振り返りの児童アンケ ートの結果が伸びて いるが、その要因は不 明。 (3)12月実施 (4)83.9%	3	3	・Google Classroom を使って授業実践交 流を行い、指導改善に つながるような双方 向のやりとりが行わ れるようにする。 ・児童の学びの自覚化に 有効な振り返りにつ いての実践を共有し、 目指す振り返りの姿 を明らかにする。	・Google Classroom を通じ て実践を交流し合い、 自身の教材研究を見直 す教職員が増えた。 ・振り返りの実践交流も 進み、児童が振り返り をする意義を考え、教 師の役割を明らかにす ることにつながった。 ・標準学力調査を【標準 スコアによる経年比 較】で見ると5学年 ×2教科=10項目中7 項目に伸びが見られ た。 (3)52.1% (1年生1.5%) (4)81.2%	4	3	4	・目標に対する成果を見 取る評価指標の設定の 仕方を見直し、集団や 個人、経年比較など多 様な視点で分析をする ことで現状を捉え、授 業改善に生かすように する。 ・児童の資質能力向上に つながるような授業づ くりについて、教科の 本質を追求しながら、 引き続き追求してい く。
2	互いを認め合う 雰囲気での満ちた 学校		見 直 し	・千田小学校の全ての 人が相手を大切に する行動、言葉を使 えるようになる	・掃除の仕方を学ぶ機 会を設け、掃除に対 する意欲を高める ・「君それいいね」プロ ジェクトを継続し、 憧れとなる良い姿を 学校全体で共有する	(5)掃除に対する肯定的 意識をもつ児童の割合 を年度当初より伸ばす (6)「学校、学級が居心地 のよい場所である」と 感じる児童・教職員の 割合を90%	・6月から縦割り掃除を 始め、それぞれの担当 を責任もって取り組 もうとする児童の姿 が見られた。 ・「君それいいね」プロジ ェクトは自発的に取 り組む姿が少ない。 (5)90.8%→92.1% (6)児童 86.4% 教職員 93.1%	3	3	・掃除の仕方を学び、目 指す姿を広める活動 を行う。 ・相手意識をもった行動 を「君それいいね」プロ ジェクトで取り上げ る。 ・特別活動での実践を交 流する。	・「マイぞうきん」の取 組を通して、物を大切 にしようとする児童が 多く見られるように なり、掃除に対して前 向きに取り組む児童が 増えてきた。 ・「君それいいね」プロ ジェクトを掃除や学 習、行事に焦点化して 実施したことで自発的 に取り組む児童が増 え、他者意識を向上さ せることにもつなが った。 (5)90.8%→92.1% →91.6% (6)児童 87.6% 教職員 94.4%	4	4	4	・学校行事や児童、教 職員共に頑張りたい ことを、学校全体で 周知して行ってい く。 ・低学年を中心に掃除 の仕方を外部講師か ら学ぶ取組を継続し て行い、学校全体で 仕方を学ぶ機会を設 けていく。

1	自らの健康維持・ 促進に努める		新規	<ul style="list-style-type: none"> 自分の健康（運動・食・安全）について考え、体作りができるようになる児童を増やす 	<ul style="list-style-type: none"> 体験的に憧れや理想となる姿を学び、運動への意欲を高めたり、運動する時間や場の設定をしたりする 地域と連携し、体験的な活動を通して、食の大切さに気付くことができるようにする 怪我をする児童を減らす取り組みをする 	(7)運動に親しんでいる児童の割合を80% (8)好き嫌いなく給食を食べている児童の割合70% (9)以前よりも怪我をしないように気をつけて生活することができた児童の割合を80%	<ul style="list-style-type: none"> 行事を通して運動が好きだと回答する児童が増えた。 熱中症対策などで外遊びができない時の取組ができていない。 全体的にアンケートの数値は目標を達成しているが、具体的な児童の様子までは把握できていない。 (7)86.7% (8)79.5% (9)85.1%	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 握力向上の取組を行い、基礎体力を高める。 遊びの紹介を通して運動する児童を増やす。 給食時間に学級指導を行う。 わくわく農園の取組を通して食の大切さに気づかせる。 保健委員会の取組やミニ保健で、けが防止についての啓発を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 体育委員会の取組や大縄跳び大会などの行事を通して外遊びをする児童が多くなった。 栄養士の指導やミニ保健での指導で、児童が食や安全の大切さに気付くきっかけとなり、自分たちでできることについて考え、全校に呼びかけるなどの取組が広がっている。 (7)85.1% (8)75.0% (9)86.0%	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 継続的に外遊びがしたいと児童が想える取組を来年度も実施していく。 わくわく農園の取組や給食時間での取組を通して食の大切さに気付かせ、嫌いなものでも食べようとする態度を育てる。 ミニ保健や学校の危険箇所についての掲示などを通して危険予測ができるようにする。
---	--------------------	--	----	---	--	---	--	---	---	--	--	---	---	---	---

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。